

の^り仏法に したが い みほとけに
 と^わ永遠の 平和を いのるなり



聖堂での「朝の祈り」



平成21年2月10日

第30号

発行 梅花流師範・詠範の会
 会長 柴田弘一
 題字 初代会長・故加藤信三師
 編集者(広報部) 亀谷 隆道

梅花流師範・詠範の会事務局
 五城目町 待月院 嶋森憲雄
 電話 (0188-52-9566)

梅花講を盛んにしよう

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 柴田弘一

新春のお慶びを申し上げます。

皆さまにとりまして健康で佳き年であります様ご祈念申し上げます。

さて、当寺梅花講は、新しく二十数名の入講と共に、昨年六月より月二回のペースでおいこを続けて来ました。

梅花の教典、フクサ、梅花服、輪絡子、念珠を段階的にそろえて第一歩を歩みはじめたわけですが、その折り、八月、西目シーガルでの「県奉詠大会」に参加し、初登壇奉詠のデビューは感激ひとしおのものがありました。

それと共に、男鹿の大龍寺さまでの一泊研修会への参加が、講員の更なる意欲をかめた様に思います。

この一月には、ようやく念願の「鈴と鉦」を揃えておいこに入りました。おけいこは第一と第三土曜日。午後二時から四時までで、十一月から三月迄は日没も早いので三十分早目にはじめています。

昨年十二月の「おいこ納め」の日には、第一部として「成道会(じようどうえ)」を行い、献燈ののち半年間で学んだ詠讃歌を奉詠し、第二部の「反省会」では、最高の盛り上がりを見せました。

そのうち一人一人にマイクがまわり、入講のきっかけや、おけいこの楽しさ、むずかしさなど、次々に述べてくれましたが、以外に多かったのは「以前から興味を持っていたが、ようやく入れて良かったー！」でありました。住職の怠慢を痛感させられ、赤面の思いでした。

又、「法要に参列した時、ご詠歌のお唱えを聞いて感動し、自分もやってみたいと思った」、あるいは「身近な亡き人の供養と思って」等々。中には感涙しながら思いを述べてくれた方もありました。

私は現今まで自分のところの講を一番世話していなかった様で、反省することしきりです。副住職も、この春梅花養成所二年間の養成期間を終えて来ます。講員と共に学び合いながら梅花の魅力を伝えて行ければ、と思います。

又、一人でも二人でも講員を増やして行ける様、折々に檀信徒に直接呼びかけて行きたいと思っています。

今年もどうぞよろしく。

梅花流秋田県奉詠大会に参加して

自性院寺族 築地 悦子

お盆も過ぎた八月二十六日、爽やかな晴天の日に由利本荘市公民館「シーガル」に於いて中央、県南地区の大会が開催されました。私は「シーガル」での大会は初めての参加でしたが、きれいなホールの中で、いつものように心地よい緊張感がありました。開会式が荘厳な雰囲気が始まり登壇奉詠へと進みました。昨年までの会場よりも舞台が近く、講員の方々のお唱えと聞いている私達とが一つになっているように感じられました。

登壇奉詠が終了し、次は、露の新治師匠の講演が行われました。落語家の師匠のお話はどのようなものだろうかと楽しみにしておりました。講演のお話は、何度も何度も笑いの起こる楽しいお話でした。その中には、師匠ご自身の大病を煩った時の気持ちや、その後の考えが含まれており、笑いの中にも命の大切さを感じさせられる内容でした。講演を聞いた後の閉会式での「まごころに生きる」のお唱えは、私の心によ

り深く響いてきました。頂いた命を大切にし、また人に対する気持ちも

考えながら生きていかなければならないと改めて思いました。

父、母の供養にと思い始めた梅花流詠讃歌ですが、今では詠讃歌を通じ、たくさんのご縁を頂き、とても有り難く思っております。

これからも、ご指導を頂きながら続けて参りたいと思えます。年に一度の大会で気持ちを引き締めることのできた一日となりました。

有り難うございました。 合掌



県北奉詠大会開催報告

鹿角にて

昨年八月三十一日に鹿角市の記念スポーツセンターにおいて県北の奉詠大会が開催されました。

今回からまた全県を北と南に分けての開催になり七百有余名の講員が参集し、それぞれの課題曲を程よい緊張の中で奉詠して頂きました。

会場になった鹿角市といえば日本三大囃子（東京神田明神囃子、京都祇園囃子と並ぶ）として有名な「花輪ばやし」があります。昼食後のアトラクションとしてその陽気な鉦



と太鼓くチャカチャンチキチンチャカチャンチキチンくと軽やかな横笛とともに踊り手が繰り出すと、そこはもう夏祭りの熱気あふるる会場に変わっていました。

二人一人のお唱えが小規模ゆえに、身近で顔が見える大会となります。また、何よりそれぞれの担当地域の特色を出して地元活性化にもつなげることができ、そこに講演やイベントを付することによって梅花流の敷術とともに布教にもなります。

今回もその特色を十二分に発揮した県北鹿角大会は五十二ヶ寺講の参加による全十六登壇を終え、最後に「四摂法御和讃」を同詠して円成致しました。

梅花のつどい

中央地区梅花一泊講習会開催

男鹿市 大龍寺



紅葉の下で講員と共に

十一月七〜八日、

一泊講習会が男鹿市大龍寺で行われました。当寺では七年ぶり三度目です。今回のテーマは「紅葉狩りと梅花講習」。紅葉の進み具合に毎日やきもきしていましたが、当日紅葉を記念写真に収め参加者に手渡すことができました。

てホッとしました。毎年見ている寺の紅葉も、多くの人に喜んでもらえると更に綺麗に見えてきます。自然の姿は人の心にも活力を与えてくれますが、これも自然の恵みの大きな一つだと思います。

講習中手伝いをしてくださった檀家さんには総てが新鮮に映った様で、たくさん感想が挙がっていました。「梅花の曲の美しさと歌詞の深さに感心しました。」「自性院さんの法話の間に尺八で奏でられた懐かしい曲に思わず口ずさんでしまい、時間が過ぎるのを忘れてしまった。」万燈供養では「世の中毎日悲惨な事件があるけれど、もしこの場に加害者の人がいたならば、あんな事件を起こさずに思いとどまることが出来たのでは」と言う声が聞かれました。



錦織あざやかに龍王殿に映えて

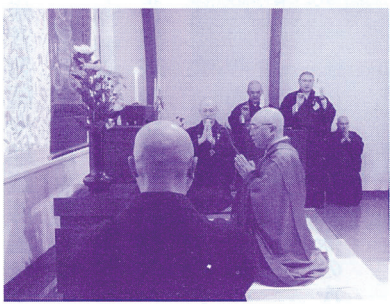
写経では、初めてという講員さんも静かに集中され、最後まで書き上げていました。また檀家の坂本さん指導の体操では笑いが絶えず腹筋も鍛えられたと思います。因みに坂本さんは体操指導の他に「ユーマと健康について」の講演をされている方です。ところで大龍寺梅花講発足のきっかけは、檀家さんが御授戒に参加し、初めて梅花に触れたことでした。今回、講員さんではないけれど、お手伝いとして関わってくれた方の反応がよかったです。御授戒ほど大掛かりでなくとも、法要・坐禅・写経・法話など色々々々やる、講員でなくても気軽に参加できる仏教入門研修会があつてもいいのではと思います。御詠歌に親しむよいきつかけになると思います。事務局として会場主として携わり、個人の反省点は数え切れませんが、

二日間びっしり付き合っていたいただいた柴田先生はじめ講師の先生方檀家のお手伝いさん、そして何より参加してくださった講員の皆さんに支えられ、なんとか終えることができました。この紙面を借りて感謝申し上げます。大龍寺副 三浦 賢翁

【県北地区】梅花講員一泊研修会

十一月十九・二十日の二日間、大滝の「富士屋ホテル」を会場にして梅花講員一泊研修会が行われました。この日はあいにくの大雪に見舞われましたが、県北各地から約百三十人も講員さんが参加されていた講習でした。

皆さん本当にこの日を楽しみになさっていたのが伝わって来ました。そんな中で私も一緒に受講させていただいたわけですが、私自身の日々の梅花に対する姿勢もろもろ反省させられるばかりです。研修にもいろいろと形態があるかと思いますが、今回の研修では聖堂での「朝の祈り」がとても印象的でした。聖堂中央の十字架の下に三尊佛をおまつりしているのは違和感あるものですが、いざ始まると不思議とそんなことは関係ありません。お寺の本堂とはまた違った雰囲気ではありますが、宗教は違っても聖堂というのは神聖な場所、身の引き締まるものです。音のよく響く聖堂での師範の先生の独詠、講員一同での詠唱は涙を流す講員さんもあるほど澄んだ音が響き渡っております。



まさに同行同修のよろこび、これからもっと梅花を学び、その魅力を味わえるよう努力して参りたいと思います。全應寺徒弟 佐藤 宗明

梅花のふるさと

（詠讃歌の生まれた風景（そのハ 三宝御和讃））

釈尊の誓いを願う僧堂歌

愛媛県瑞応寺

三宝御和讃

心の闇を照らします

いとも尊きみ仏の

誓願ちかいを冀ねうものはみな

南無なむ帰依えい仏ぶつと唱となえよや

作詞 高田道見

◇瑞応寺の出遣い◇

曹洞宗梅花流育ての親の一人、赤松月船師あかまつげつせんは、大正三年、数え年十八歳の時、中国四国地方の曹洞宗修行道場、愛媛県瑞応寺ずいおうじに入門しました。

その頃、瑞応寺第二十六代の堂頭どうとうとして修行僧の指導にあたっていたのは高田道見たかだみ老師でした。

高田老師は瑞応寺の興隆に大きな功績をなした方ですが、同時に一方の活動の拠点を東京に置いて精力的な布教伝道や文筆活動を行ない、全国的に知られた名僧でありました。瑞応寺には高田老師の教えを求める修行者達が、宗派を超えて各地からやって来るのでした。高田老師は優れた仏教研

究者としての一面を持ちながら、新しいスタイルの伝道活動をされた布教者でした。人々に対してはつねにわかりやすい教えを説く「通俗」という立場を心がけ、また和讃を作詞・作曲し、ご自分で大正琴を弾いて法堂で修行僧達にその曲を教え

【瑞応寺修業時代の赤松月船師】



前列左から二人目が赤松師

◇お釈迦さまの誓願を慕う◇

することもしばしばでした。全国から集う多士済々の修行者達。新進の禅風をふるう名僧・高田道見堂頭。それが青年僧・赤松師の学んだ瑞応寺僧堂なのでした。

高田老師の禅の教えとは、お釈迦様を信仰の中心に置く「法王教」という教えでした。仏教では大日如来や阿弥陀如来、観音菩薩や地藏菩薩などたくさんのお仏がいますが、その中で最も尊い仏、つまり《仏法中の王》法王であるお釈迦様に、絶対の帰依を誓う教えが曹洞宗の立場である、というのが高田老師の考えでした。そしてほかならぬ道元禪師こそ、そうしたお考えの持ち主であつたと高田老師は述べています。

『法華経』というお経の一節に、お釈迦様の次のような言葉があります。

「私はいつでもこのように考えている。へどうやったら、生ある者達を、最高のおさとりに入らせて、少しでも速く《仏》にさせてやる事が出来るだろうか」と

菩提樹の下でお悟りを開いて以来、お釈迦様は生涯「世の人々をなんとかして迷いの中から救い出し、本当のお悟りへ導いてあげたい」と願い、その実践に努めていました。その願いは、お釈迦様がお涅槃を迎えるに至っても、なお後の世までも続く誓願として、弟子達に託しました。『法華経』の言葉は、一度は寿命が尽きたように見える

お釈迦様のいのちは、靈鷲山りょうじゆせんに生き続け、この世に迷い苦しむ人のあるかぎり、永遠にその誓願を果し続けるということを描いたものです。

こうしたお釈迦様の《衆生しゆじゆうさいど濟度じやくど》人々を迷いから救う」という誓願を、かたくなに信じていたのが道元禪師であり、高田老師だったのです。

瑞応寺の修行僧達のために、高田老師はご自分のお考えを、わかりやすい七五調の御和讃にまとめた僧堂歌を作りました。その一つが後に『三宝御和讃』として梅花流に取り入れられることとなる『三宝唱歌』だったのです。その頃は、次のような四番の歌詞もありました。

おしえのもとはいづくぞと 仏の道をたずぬるに
いつもかわらぬものはただまことひとつの心なり

◇高田老師から赤松師へ◇



〔高田道見老師〕

『三宝御和讃』が梅花流詠讚歌の一曲として発表されたのは昭和二十八年のことでした。高田老師はこれより三十年前にお亡くなりになつていました。瑞応寺の僧堂歌が、梅花流詠讚歌となつたいきさつについて詳しくはわかりませんが、当時梅花流の基礎づくりに参加していたお一人が赤松月船師だったことが、その理由の一つとして考えられます。赤松師は『三宝御和讃』の歌詞について次のように解説しています。

およそ三宝御和讃の全篇にわたって中心肝かんどころである字眼じかんはどこかと申しますと、それは「誓願せがんを冀ねがうものはみな」という一句であります。

法華經ほけきやう寿量品じゆりやうひんは、仏様のお命のあり方をお説きぶお言葉に「つねにみずからこの念をなさん、何をもつてか衆生をして、無上道に入り速やかに仏身を成就じゆじゆすることを得えせしめん」とこうあります。

一切衆生いっさいしゆじゆうの仏身成就ぶつじんじゆじゆということが、仏様の理想であり仏様のお命であることが、これによって明らかであります。されば、承陽大師じやうやうだいしも「これ仏の寿量じゆりやうなり。」すなわち仏様のお命とせられるところであるとおっしゃっています。

仏様の誓願が仏身成就にあるとしますならば、その誓願を素直に受けとって、その誓願の通りに仏身をわが身の上に成就し完成して仏様のからだにならせていただく。それを自分の生きる生き方の上に働かせてゆくのでなくてはなりません。これが「誓いを冀う」その願いの意味であります。

〔梅花〕一、昭和三十五年 梅花流正法教会総本部



〔曹洞宗専門僧堂・愛媛県瑞応寺〕

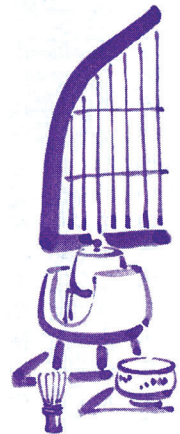
高田老師が「法王教」という名に託して語ろうとした教えは、「お釈迦様の誓願」を信じ、そこに私たちのいのちをあずけてゆくということでした。赤松師の解説には、そうした高田老師の教えがよく活かされていることがわかります。

《人々の心の闇を照らします》という、いとも尊きお釈迦様の誓願「それを慕したい、こいねがう私たちの心からの声が、「南無帰依なむきえいぶつ仏」というお唱えなのです。

本稿作成のためにいくつかの文献資料、ならびに瑞応寺現堂頭・榎崎通元師と島根県安養寺・村上正光特派師範の御教示を参考にさせていただきました。記して感謝申しあげます。文責、広報部・佐藤俊晃

みんな！梅花やらネイガ！

おらほの梅花講



山寺	住所	山本郡三種町鹿渡
嶽庵	設立	昭和五十六年
高松	講長	渡邊 紫山
	講員	十五人

当松庵寺の梅花講は、先々代住職の時代の「お講」から始まります。講員は五、六十人。お経と法話とお茶会でした。先代の時代、昭和五十年頃より「本山講」と改称し、本山参拝旅行を毎年行い、お経に加えて法具なしで詠讃歌もお唱えしていました。

昭和五十六年、「梅花講」を設立しました。教区内に梅花熱が高まつてきた時代でした。梅花の指導は母の担当になり、高齢になった講員に替わって次の世代が増えていきました。そして、お寺の年中行事、各種の法要には、梅花講が欠かせない存在になっていきました。

現在、講員は精鋭部隊となりましたが、毎年修行する成道会をご紹介します。



十二月八日前後の吉日を卜して法要、奉詠を行います。法話の後、献供された五味粥を右の手のひらに受け頂きます。そして昼食に精進料理を頂くのです。

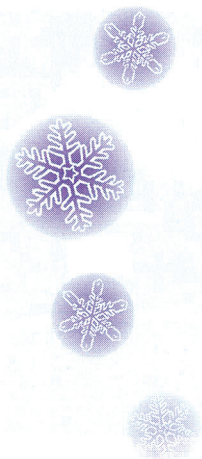
献立は、「アズキ粥」「茶飯(ギンダケ・糸コン入り)」「風呂吹き大根」「薇(ゼンマイ)の煮付け」「飛竜頭(ひりゅうず)と生麩(ふ)の煮付け」「ギンダケ・生麩の吸い物」「薄焼き卵・キュウリ・カニスティックの甘酢和え」「栗の渋皮煮」「かぼちゃプリン」「りんご甘煮」です。

山や海からのお恵みを、寺族二人二日ばかりで準備した味は格別です。

持ち寄られた「漬け物」もいっぱい並んで話が弾みます。みんなの顔が笑顔になって、とても楽しい梅花講です。

お正月の新年会は、更にカラオケ大会や芸達者な仮装大会、福引き等で盛り上がるのです。

紹介者 講長 渡邊紫山



写真で見る基本作法

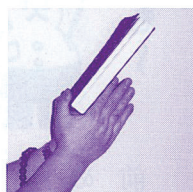
～(その12) お誓いの唱え方～

もしも、あなたが謹行式や大会の時に「^{こしょうし}挙唱司」(お誓いをとなえる役)になったらどうしますか。そんな時は突然やってきます。講習会の開講式であてられて、師範先生に挙唱司の作法をにわか仕込みで覚える人も少なくありません。

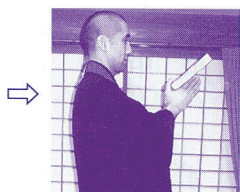
単純だけど大切、「作法是宗旨」というように、ちょっとした振る舞いもきちっと行ってこそ価値があります。挙唱司は大会や講習会の参加者が多かろうと少なかろうとあなた一人だけなのです。その瞬間、何千人の代表となって仏祖の御前でお誓いをする。米国のオバマ大統領の勝利宣言に匹敵する役目です。(大袈裟ですが)

さあ、今すぐ経典を捧持してお誓いの練習を致しましょう。あなたの一挙手一投足に講員が、世界が、仏が、注目しています。「Yes, We, Can」。

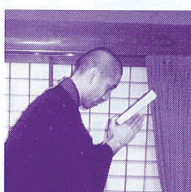
【お誓いに至るまで】



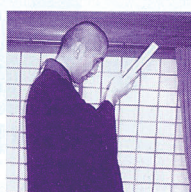
① 教典をタテにして合掌の親指と人差し指の間に挟み持つ。



② 挟み持って捧持し入堂する。



③ 挙唱する位置につき仏祖に一礼する。(一同合掌一礼)



④ 経典を頂く。



⑤ 開いて「お誓い」と挙唱し一呼吸おいて「私達は」と続ける。一同合掌のまま「私達は」から復唱。

【お誓いが終わって】



① 唱え終わって挙唱司は経典を閉じる。



② 経典をいただく。



③ 捧持して仏祖に一礼す。(一同合掌一礼) 身を転じて退堂する。

◇ 他の留意点 ◇

◎ 経典を開くとき、閉じるときは胸の前にて。

※ なお、勤行式の前、または勤行式に引き続いて「お誓い」を唱える場合は、挙唱司も合掌にて唱える。

〒000-0001
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺(011-8731-2675)

※ご意見、ご要望等お気軽にお寄せ下さい。

▼六月六日 真清水
十三日 地藏(和)
二十日 慈念
二十七日 報謝(和)

▼五月二日 修証義(和)
九日 供華
十六日 追善(和)
三十日 開山忌(和)

▼四月四日 溪声(総持一番)
十一日 歓喜(一)
十八日 まごころに生きる
二十五日 御授戒(和)

▼三月七日 不滅
十四日 高嶺
二十一日 紫雲(釈迦)
二十八日 梅花(太祖一番)

▼二月七日 観音(和)
十四日 慈光
二十一日 浄光
二十八日 誓願(和)

☎011-8731-7676

(毎週土曜日にテープが代わります。)



ちよっと ぶじょほう ~梅花つれづれ~



梅花も、そして子育ても



子供の頃、雪ダルマを作り始めると半日がかりで、しかも途中で飽きてしまい、完成さ

せたことなど数えるほどでした。

先日、息子と雪ダルマを作っていた時、自分の子供の頃を思い出しました。あの頃は雪球を作り転がしても途中で割れてしまうか、あるいは全然丸くならず嫌になって諦めるか。

幼少の頃を振り返りながら、丸い大きな雪の固まりに、中くらいの丸を乗せて、目と鼻と口を作り、杉の枝で手を作り、ものの三十分ほどで完成してしまいました。

随分はやく出来るものだな、まあの体の大きさも違うし力も、経験もしたし子供の頃とは違うよな、あれこれ考えながら雪ダルマのそばでスコップ片手にはしやく息子を眺めていました。



子育ても雪を丸めるがごとく

い出しながら反復練習をしました。そんな中で近藤前梅花主事老師より養成所の縁を頂戴し、多くの出会いと経験を戴きま

現在、身を置いている世界では、自分はまだまだ幼子そのものです。それは日々のお寺の勤め、檀家さんとの付き合い、そして五年ほど前、ひよんなぎっかけで始めた梅花流詠讃歌。この雪球は何度転がしても大きくならず、時には割れてしまい、それでも何とか諦めることなく、今でも丸め続けています。

始めた当初は本当にひどいものでした。まず、あの妙に細かく丁寧な作法に挫折しそうになりました。(この作法には今も苦しめられています)それから撞木。ともに鉦にあらず、しつかり振り下ろすことも出来ず、

野球部、剣道部の頃を思い出して素振りをしました。

修証義御和讃の出しのラ音がいつもソ音になってしまい、目の前では師匠が笑い、それが余りに悔しくてバスケット部の頃のシュート練習を思

した。

只今は、作法もお唱えも中途半端なまま、いびつな雪球を何とか大きく丸めようと転がしてあります。これからもずっと大きな丸になるように。

師範の先生方、共に歩んで下さる御法友の皆様、講員様方、これからもよろしくお願ひ申し上げます。

十教区 正法院副 清水道広 九拝

◆禅センター・梅花講習日程◆

【僧侶・寺院研修会】

二月十六日(月) 午前十時半〜午後三時半

講師 本間雅憲師範

課題 不滅・永光(総持二)

【檀信徒講習会】

二月十三日(金) 午前十時半〜午後三時

二月十三日(金)

講師 三浦賢翁・佐藤晃心師範

課題 報恩供養御和讃・澄心

三月十三日(木)

講師 亀谷隆道・清水道広師範

課題 開山忌御和讃・真清水